

《現地報告》

タンザニア・トングウェ族の農耕 ——湖畔と山地農耕の比較——

伊 谷 樹 一*

I はじめに タンザニアの西端には、南北に延びる長大なタンガニカ湖があり、その東岸には、ミオンボ林と呼ばれる乾燥疎開林が広がっている。湖のほぼ中央部に突き出た半島には、ンクングウェ山を主峰とするマハレ山塊が南北に走っている。かつてこの地域は、焼畑農耕を主生業とするトングウェ族の生活圏であったが、タンザニア政府が推進してきたキジジ・チャ・ウジャマー（同胞の村）政策によって人々は徐々に山を下り、湖畔の低地に定着していくようになった。さらに1984年、政府はチンパンジーの貴重な生息域であるこの地を国立公園に指定し、このことがトングウェ族の定住化に拍車をかける結果となった。1985年の終りには、ほとんどの村から人影は消え、わずかに数ヶ村のみが従来の山住み生活を続けていたが、それも数年後には、政府によって家屋の強制的撤去がおこなわれ、1989年にはマハレ山塊一帯は完全な無人地帯になってしまった。広大なミオンボ林に包まれ、外部の影響を受けることのなかったマハレ山での伝統農耕は、こうして姿を消してしまった。

筆者は、マハレ国立公園発足直後の1985年11月から約2ヵ月間、マハレ山とその周辺地域の村々を訪ね、いくつかの異なった環境で生活する人々に接することができた。そこでおこなわれる農耕の多様性を、人々によって選択される作物や栽培体系に見ることができた。本稿では、失われてしまったマハレ山民族の農耕変化の記録と、湖畔低地の定着農耕とを比較することによって、同一の部族社会に属す人々が、環境の違いによっていかに農耕の体系を変えて生きているかということについて考察したい。

トングウェ・テリトリーには睡眠病を媒介するツエツエバエが多く、畜牛を飼育することは困難である。また、彼らの生業の一端を担う狩猟や漁労も、湖畔への人口集中と、ザイルからの移住漁労民ベンベ族の進出によって、圧迫

*いたに じゅいち、京都大学農学研究科

を受けているといわれている。それゆえ、タンバク質供給源としてのマメ科作物の栽培は、より一層重要な存在となっている。そこで、彼らの伝統的マメ科作物であるササゲを中心に、マメ栽培の現状についてもまとめてみたい。

II 調査地域 タンガニイカ湖畔の町キゴマの南約100kmのところに、トングウェ・テリトリーの玄関口であるムガンボがある。トングウェ・テリトリーは約20,000km²、その約80%はミオンボ林とサバンナ性二次植生によって占められている〔伊谷1970〕。

湖畔での調査は、湖岸に沿って隣接するカトゥンビ、コンクワ、ムガンボの3地域でおこなった。マハレ山中には、この時点で4ヵ村が残在しているにすぎなかったが、そのうちントド、イルンビ、カルイガイジェの3ヵ村について調査をおこなった(図1)。最も内陸に位置するイガブリロの村へは、ライ

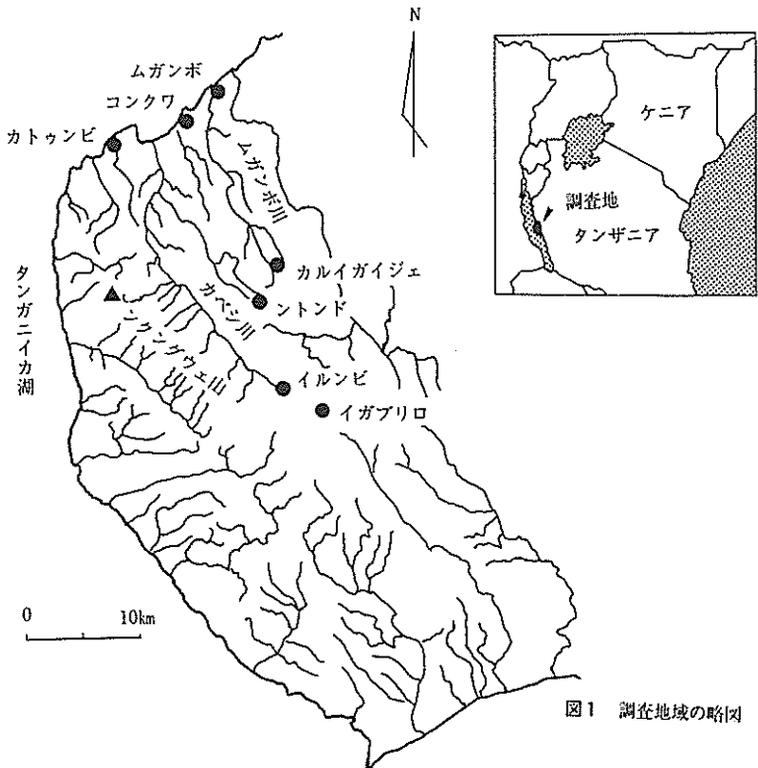


図1 調査地域の略図

オンが頻繁に現れるという情報があり、調査を断念せざるをえなかった。
調査は、観察とスワヒリ語によるインタビューによっておこなった。

Ⅲ トングウエ族 Murdock [1959] は、トングウェ族をタンガニイカ・バントウーのニヤムウエジ・クラスターに属するとしている。トングウェ・テリトリーには、出身部族の異なるベンデ族、ホロホロ族、トングウェ族が生活するが、掛谷 [1974] は、言語の類似性と生活様式および文化の共通性からこれらを同一部族と考えている。

1963年以來、この地域では京都大学を中心とする日本人研究者によって、チンパンジーの調査がおこなわれてきた。それと平行して、この同じ地域で多彩な生業を営むトングウェ族の興味深い生活様式や複雑な社会構造が徐々に明らかにされていった。彼らの生活は強く自然に依存したものであった。

1971年と1972年に、トングウェ族の生計維持機構について詳細な調査をおこなった掛谷 [1974] によれば、トングウェ族にとって恨みや妬みは呪術の対象となり、トングウェ族の社会には、この超自然の世界に裏付けられた2つの基本的な傾向性が認められるという。ひとつは最小努力の傾向性であり、消費量を大きく上回るような生産活動はおこなわず、したがってほとんど余剰をもたない生活が営まれている。もうひとつは、食物を平均化するという傾向性である。世帯生産量の約40%は客によって消費され、それによって生じた不足分は、自らもまた他の集落におもむいて他者の生産物に依存する。このネットワークによって、世帯や集落の収量格差は平均化され、余剰生産のない生活の維持というシステムが守られている。逆に言えば、この相互扶助機構によって、余剰生産のための労働は制約を受けているのである。

このようなトングウェ社会の傾向性と、超自然的世界の存在は、余剰生産につながる耕作面積の拡大を規制し、焼畑耕作を続けていく上で、必ずしも十分とはいえない可耕作森林を維持するのに貢献しているものと考えられる。

Ⅳ 湖畔定着 民の農耕 ムガンボ周辺は、タンガニイカ湖とすぐ後背のマハレ山にはさまれた細長い平野である。かつて湖岸にまで広がっていたといわれるミオンボ林は山裾まで伐り開かれ、一面の農地となっている。この平野では、川辺と精霊の住む小山の頂を除いて、有用樹種以外の木はほとんど見ることができない。人口密度の増加に伴う農地の拡大と、燃料確保のために、村近くの木はことごとく伐採されてしまったのである。

ムガンボには、週2回タンガニイカ湖を南北に往復する客船が訪れる。トングウェ族の人々にとって、このときがほとんど唯一の交易の機会である。人々は、農産物を積み込んだ丸木舟に乗り込み、客船上で塩や衣服といった生活品との物々交換や、貨幣による売買をおこなう。したがって、ムガンボは生活必需品を含む品々の流入口であり、トングウェ経済の中心地になっている。船着場となる浜辺を中心に家屋が密集し、村内には大きな畑地が存在する余地はない。ムガンボの南にはコンクワ村がある。その境界は判然としなが、彼らがコンクワと呼ぶ地域には、小集落とともに畑が存在する。これらの集落には数軒から十数軒の家がかたまり、そのまわりかあるいは近辺に、自分たちの畑をもっている。しかし、家の周辺の畑はわずかな面積しかもたず、カベシ川を中心に広がるカトゥンビまで耕作に出かけるものも少なくない。つまり、農業生産の中心地はカトゥンビなのである。ムガンボやコンクワに家をもつ人々の多くは、雨季の間はカトゥンビに建てた出作り小屋で農作業をしながら生活する。なかには、カトゥンビに本拠を構えているものもあるが、家屋は数百メートルの距離を隔てて散在し、まとまりのある村といった形態を呈していない。カトゥンビは、村というよりはむしろムガンボやコンクワを支える穀倉地として機能しているという印象が強い。コンクワの畑が閑散としたイメージを抱かせるのに対して、川をはさんで広がるカトゥンビは、作物が鬱蒼と繁茂して、蒸し暑く感じられるのは、地下の水利条件の違いに起因しているのかもしれない。

トングウェ族の農業は天水依存農業で、湿地以外で乾季に栽培がおこなわれることはない。雨季は10月から4月の約6ヵ月間で、その間約1ヵ月の小乾季を含んでいる。しかし、この小乾季がいつくるのか、またそれがどれほど続くのかは、年によってまちまちであるという。雨量は年間700-1000mm、雨季の前半は豪雨、後半は小雨が降り続くという〔掛谷 1974〕。土壌は主に黒土であるが、ムガンボやコンクワには赤土も多く見かける。

掛谷と筆者が確認した湖畔での栽培作物は表1の通りである。30種におよぶ作物が栽培されているが、そのほとんどはわずかに植えられているにすぎず、数種の作物が占有するきわめて単調な田園風景を呈している。以下に、代表的ないくつかの作物とそれらの栽培に言及することにする。

1. キャッサバ 湖畔での主作物はキャッサバとトウモロコシであり、彼らの主食であるウガバの栽培 リ(熱湯にデンプンの粉を入れ、こねてだんご状にしたもの)には、このいずれかの粉が用いられる。キャッサバは、年間を通じて収穫が可能で、栽培面積

表1 トングウェ族の栽培する作物

和名	学名	種子	利用部位				湖畔	山地
			果実	葉	茎	芋		
禾穀類								
トウモロコシ	<i>Zea mays</i>	◎					●	●
イネ	<i>Oryza sativa</i>	◎					●	
ソルガム	<i>Sorghum bicolor</i>	◎					●	
	<i>S. brericiarinatum</i>						●	
シコクビエ	<i>Elicusine coracana</i>	◎					●	
イモ類								
キャッサバ	<i>Manihot esculenta</i>		・	○	○	◎	●	●
	<i>M. dulcis</i>		・	○	○	◎	●	●
サツマイモ	<i>Ipomoea batatas</i>			・	・	◎	●	●
ヤム	<i>Dioscorea bulbifera</i>					*	●	
	<i>Dioscorea</i> sp.					◎	●	
タロイモ	<i>Colocasia esculenta</i>					◎	●	
ジャガイモ	<i>Solanum tuberosum</i>					◎		●
マメ類								
インゲン	<i>Phaseolus vulgaris</i>	◎		○			●	●
キマメ	<i>Cajanus cajan</i>	◎					●	
ササゲ	<i>Vigna unguiculata</i>	○		◎			●	●
ラッカセイ	<i>Arachis hypogea</i>	◎					●	●
バンバラマメ	<i>Voandzeia subterranea</i>	◎					●	
野菜類								
プランテイン	<i>Musa</i> sp.		◎				●	●
カボチャ	<i>Cucurbita maxima</i>		◎				●	●
	<i>Cucumis</i> sp.		◎				●	●
ヘチマ	<i>Luffa cylindrica</i>		◎				●	●
トマト	<i>Lycopersicon pyriforme</i>		◎				●	●
	<i>L. cerasiforme</i>		◎				●	●
キュウリ	<i>Cucumis sativus</i>		◎				●	
ナス	<i>Solanum melongena</i>		◎				●	
トウガラシ	<i>Capsicum annuum</i>		◎				●	
ヒユ	<i>Amaranthus hybridus</i>			◎			●	
アブラナ	<i>Brassica integrifolia</i>						●	
タマネギ	<i>Allium cepa</i>				◎		●	
ウコン	<i>Kaempferia</i> sp.					◎	●	
果物類								
バナナ	<i>Musa</i> sp.		◎				●	●
レモン	<i>Citrus</i> sp.		◎				●	
オレンジ	<i>C. aurantium</i>		◎				●	
マンゴ	<i>Mangifera indica</i>		◎				●	
パパイヤ	<i>Carica papaya</i>		◎				●	
パイナップル	<i>Ananas comosus</i>		◎				●	
ナツメヤシ	<i>Phoenix dactylifera</i>		◎				●	
その他								
ゴマ	<i>Sesamum indicum</i>						●	●
ヒマ	<i>Ricinus communis</i>						●	
コーヒー	<i>Coffea</i> sp.		◎				●	●
タバコ	<i>Nicotiana tabacum</i>			◎			●	●
ヒョウタン	<i>Lagenaria</i> sp.		◎				●	
キワタ	<i>Ceiba pentandra</i>	◎					●	
サイザル	<i>Agave</i> sp.			◎			●	
サトウキビ	<i>Saccharum</i> sp.				◎		●	●
アブラヤシ	<i>Elaeis guineensis</i>		◎				●	

利用頻度：◎>○>・，*；ムカゴ

も広く、湖畔の人々にとっては最も重要な作物であると言ってよい。

トングウェが栽培するキャッサバは青酸を多く含む苦味種がほとんどであるが、甘味種もわずかに栽培されている。キャッサバの収穫は、乾季でも2〜3日に1度の割合で頻繁におこなわれ、保存のできない雨季にはこれが毎日の仕事となる。芋は、鋤で畝あるいはマウンドを崩し、株ごと引き抜いて収穫する。抜き倒された地上部はそのまま放置し、乾燥すれば貴重な燃料として利用される。収穫された芋は、まず厚めに皮を剥ぎ、毒抜きのために湖の波打ちぎわに穴を掘って埋める。3〜4日後、小枝を立てて目印にした水溜りにつけておいた芋を掘り出し、木で組んだ棚の上に並べて、2〜3日間天日に干す。湖から離れたところに住むものは、大きな土器の瓶に芋を入れて毒抜きをするが、この方法だと毒抜きに1週間はかかり、水の交換はかなり大変な作業である。乾かした芋は、毎食前に杵と臼で突いて粉碎し、ウガリとして食される。甘味種は、これらの加工を必要とせず、そのまま焼きまたは蒸し、あるいは生食する。しかし、甘味種はウガリに加工することはなく、また芋が小さいために、間食として食されることが多い。

キャッサバの植え付けは、挿し木によっておこなわれるが、東南アジアでみられるように、茎を地面に対して斜めあるいは垂直に突き刺すのではなく、40〜50cmの長さに切った太い茎を、20〜30cm間隔で地面に水平に置いて1列に埋めていく。通常、種茎の両端付近から1本ずつ萌芽するため、株の間隔は種茎の長さとその間隔に支配され、長短が交互する栽植配置となる。

トングウェの農耕で、生い茂ったエレファントグラスを鋤込んだり、枯れ草に火を付けたりすることはあっても、積極的に畑に肥料を入れることはない。しかし、カトゥンビにはもはや休閑する土地はほとんどない。彼らは、そんなことをしなくても毎年コンスタントに収量を得ることができると主張する。芋と茎に吸収された養分は確実に減少していくはずであるが、その減少分をいったいどこから補っているのか。これが湖畔農耕の最大の疑問点である。

世帯による植え付け時期はさまざまで、調査期間中、常にどこかで植え付けられていた。また彼らによると、キャッサバは雨季の間中植え付けをおこなうということであった。これは、相互扶助機構に裏付けられた社会において、天候の変動に対する保険としての機能をもっているのであろう。

キャッサバの栽培は、湖畔の砂地を除けば畝あるいはマウンド上でおこなわれ、トウモロコシ、インゲン、ラッカセイなど多くの1年生作物と混作される。この畝栽培とマウンド栽培は、いくつかの点で性格を異にしている。畝の大き

さは、さまざまであるが、幅60~80cm、長さ3~5mといったものが平均的で、いずれもその上部をやや平らにし、中央にキャッサバ、そのまわりに他の1年生作物を植え付ける（写真1）。キャッサバと他の作物はかなり密植の状態で

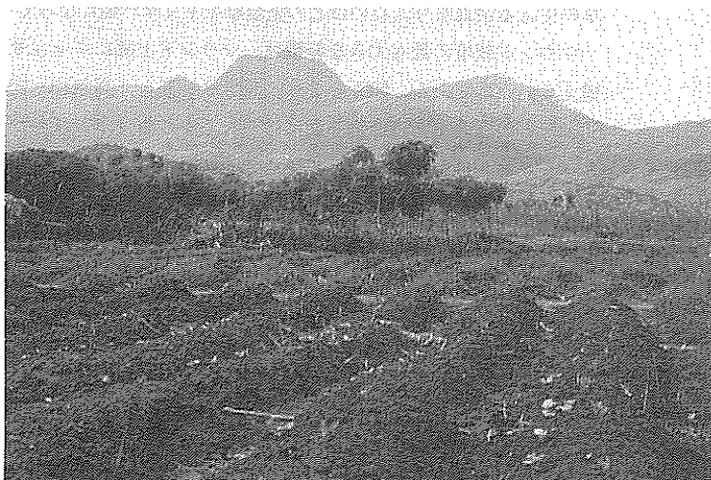


写真1 畝栽培



写真2 キャッサバ単作畑と混作畑

植えられるが、トウモロコシやインゲンが播種後約1週間で発芽するのに対して、キャッサバの萌芽には1ヵ月以上の期間を必要とするため、密植であるにもかかわらず、1年生物物はキャッサバによる光遮蔽を受けることはない。そして1年生物物の収穫以降、その畑はキャッサバの単作となり、2年目には雑草の生える余地を与えないほどの完全なキャッサバ畑になってしまう(写真2)。

マウンド栽培の最も大きな特徴は、マウンド上部にキャッサバ以外には何も植えないことである。幅1~2m、長さ2~6m、高さ40~70cmのマウンドが50cmほどの間隔をあけて畑一面に作られるが、カマボコ状のマウンド頂部にはキャッサバだけが植え付けられ、そのまわりや斜面に他の作物が播種されることはほとんどない(写真3)。他の作物は、マウンド間の溝に広い間隔をあけて植えられる。このことについて彼らは、キャッサバはあまり水を必要としないが、トウモロコシやインゲンには水が必要なのだと説明する(写真4)。この畑は、畝栽培に比べて栽植密度はかなり低い、2年目にはやはりキャッサバの単作となる。

畝立てやマウンド作りの理由について、彼らは第一に収穫の容易さをあげる。地中深く放射状に伸びる大きな芋を無傷で収穫するのは容易なことではなく、これだけの理由で畝やマウンドが作られても不思議ではないと思われる。また、多量の土盛りをするマウンド作りについて質問すると、豪雨によって種茎や芋が露出するようでは芋が育たないからという答えが大半であった。確かに、畝



写真3 マウンド栽培



写真4 マウンド間溝のトウモロコシ栽培



写真5 エロージョンによるキャッサバの露出

で栽培されているキャッサバのなかには、エロージョンによって根や芋が露出してしまっているものも少なくない（写真5）。芋の重量計測はおこなわなかったため、その真偽については検討できないが、エロージョンが芋を小型化する

る傾向を認めた。

興味深いことは、これら2種類の畑が隣接して存在しているのを普通に見かけたことである。これは、二つの耕作法が土壌や水利条件の違いに対処したものであるということを示すことになるだろう。同じ世帯が所有するいくつかの畑相互の関係や、労働力などといったさまざまな要因がそこには働いていると考えられる。しかし、栽培方法というものが作物に付随して伝播しようとするならば、トングウェ・テリトリーには二つの異なる経路を経てキャッサバが伝えられた可能性も考えておいてよいであろう。

キャッサバ栽培のもう一つの重要な意義は、若葉を食用として利用できることである。雨季の初め、最も食料の不足する端境期に、いち早く新葉をふきだすキャッサバは貴重な食品であり、またその葉の高いタンパク含有量は無視できない。

キャッサバは、今や湖畔に住むトングウェ族の人々にとってかけがえのない作物であり、湿地や小さな屋敷畑、そして2000mに近い高地を除けば、すべての畑で栽培されているといっても過言ではない。

2. 禾穀類の栽培 トングウェ族が栽培する禾穀類は、トウモロコシ、陸稲、ソルガム、シコクビエであるが、その中でウガリにして食べられるのはトウモロコシだけである。

彼らは、トウモロコシとキャッサバの混作畑と2年目のキャッサバ単作畑の2種類をもつが、トウモロコシの周年栽培が可能である川辺や湖畔の湿地を所有するものもある。しかし、こういった水に恵まれた土地はそれほど多くなく、陸稲、バナナ、サトウキビといった換金できる作物が植えられることが多いため、トウモロコシの生産は、もっぱら1年目の混作畑に依存している。

ここで栽培されている陸稲は、インディカ種であるが、キゴマなどの町で売られている米よりも粘性が高い。陸稲はわずかな農家によって限られた量が換金用に生産されているにすぎず、彼らが自家消費することはほとんどないようである。栽培は、整地された湿地に散播するといった簡単なもので、これだけは常に単作畑である。

ソルガムやシコクビエはさらにその栽培面積が限られ、現在では酒造用としての栽培が主である。

3. マメ類の栽培 マメはトウモロコシと混作されるのが常で、全マメ類の栽培面積は、トウモロコシの栽培面積とほぼ同じか、少し小さい程度と考えてまちがいない。栽培

されるマメ科作物のほとんどはインゲンである。この地域には、種子の形態や色の異なる十数品種のインゲンを認めたが、形態的にはいずれもタンザニアで一般に見られるものに含まれ、特殊な品種を見つけることはできなかった。トングウェはこれらを形態的特徴で区別し、スワヒリ語の“maharage (インゲン)”に種皮の色や模様、大きさといった特徴を付して呼び、トングウェ語にはそれらを区別する言葉はなかった。一つの農家で植えられるインゲンは1～3品種である。

インゲンについて栽培面積が広いのはラッカセイである。しかし、これは主に換金と間食用で、食卓に上がったり搾油されたりすることはない。

ラッカセイと同じ地下結実性で、アフリカ原産のバンバラマメは、彼らの多くが好むマメであるにもかかわらず、その栽培はごく限られている。彼らが食するバンバラマメは、トングウェ・テリトリ―南端の村カリヤで栽培されたものだという。カトゥンビとカリヤの間には陸路はなく、彼らのカヌーでは2日はかかる。バンバラマメは、その生育に特別な環境を必要とするわけではなく、砂地であれば容易に栽培することができる。カトゥンビの人々は、彼らが最もおいしいと評価するバンバラマメをどうして自分の畑では栽培せず、遠く離れたカリヤから入手するのであろうか。

掛荷は、好まれる作物とその栽培面積のアンバランスについて、食物平均化の傾向性が原因していることを指摘している。つまり、希少価値があり、かつ彼らの嗜好に合った作物を栽培しても、皆に乞われて、結局自分が食べる分はほとんどなくなり、何のために栽培したのかわからなくなる。それならば、ごく一般的な作物を作った方がよい、ということなのである。

この作物種構成の単純化の傾向は、外部から伝えられる作物栽培体系の浸透を制約する反面、新しい作物が彼らの価値観に触れれば、在来の栽培システムへの侵入が容易で、急速な普及を可能にするということにもなるであろう。彼らの栽培システムの変化は、おそらくきわめて複雑で、かつデリケートな要因の複合であると推測され、その探究は非常に興味深いテーマと考える。

ササゲ (*Vigna unguiculata*) とキマメ (*Cajanus cajan*) も、この地域にとっては伝統的な作物と考えられるが、その栽培面積は余り広くない。キマメは多年生植物として栽培され、2年目にキャッサバと競合しないように畝の両端や、畑の縁側に植えられる。キマメの栽培が少ないことについて、最もおいしいマメのひとつであるが、収量はインゲンの方が高いと彼らは説明する。一方ササゲは、インゲンに比べて種皮が堅いことを理由に敬遠される傾向があり、

これは、日本においてササゲよりもアズキが好まれる理由と同じである。

ササゲは東アフリカ起源とされ、この地にも数種の野生種 (*Vigna* spp.) がある。ここではササゲの生理学的知見を加えながら、トングウェ族の農耕におけるササゲの存在価値について考察を加えたい。

筆者は、この地を訪れる前に立ち寄ったタンザニア中北部のマンゴーラで、半農半牧民イラク族によって栽培される数種類のササゲを見ることができた。マンゴーラは、トングウェ・テリトリーよりも乾燥した地域であるが、人々は豊富な湧き水でできた泉に依存し、乾季にはそこから水を引いてかんがい農業をおこなっていた。しかし、泉周辺の森林には、マラリアや睡眠病を媒介する昆虫が多く、彼らの家や畑は泉から1~2 km離れた乾いた大地に作られていた。したがって、かんがい農業とはいってもそのかん水量は決して十分ではなく、また引いてきた水の多くは彼らの重要な換金作物であるタマネギ畑に使われ、他の作物の畑には時折かん水するにすぎない。食用作物の畑には主にササゲが植えられ、かん水は週に1度くらいであるが、ササゲは乾燥に強いのでこれでも収量を得ることができるといふ。畑は畦で小さく区分けされ、そこに1度に大量の水を送り込む basin かんがいがおこなわれる。地中深くで根を張ることのできるササゲにとって、このかんがい方法は非常に有効である。

この同じ一枚の畑には、6品種以上のササゲが栽培されていた。草型には立性とほ伏性の2種類があり、彼らはそれをスワヒリ語で“simama (立つ)”と“lala (寝る)”と呼んで区別し、前者を子実用、後者を葉の菜食用として利用していた。

トングウェが栽培するササゲにも、種子の形態が異なる数品種の系統を見つけることができたが、ほ伏型の草型を示すもののみで立性のものは認めることができなかつた。いずれの品種も茎葉の繁茂は非常に旺盛で、トングウェはその若葉を煮食用として頻繁に利用する。これもキャッサバの葉同様、端境期の貴重な食料である。彼らはインゲンの葉も食用とするが、インゲンは再生してこないで、1シーズンに1度しか食べることができないという。ここでは、ササゲの存在価値は種子よりもむしろ葉の利用にあり、ほとんどの品種は地上部が繁茂するばかりで、生育前半にはほとんど花芽を着けることはない。これは日本で栽培した場合も同様で、4ヵ月間に1株の全分枝長は150m以上にも達したのに対して、日長感応性がないにもかかわらず、種子収量はひと握りほどしか得ることはできなかった。こうした菜食用品種の種子が食べられることはごくまれで、それらは翌年のタネとして大切に保存され、調査当初はこの種

子入手することができなかったほどである。

しかし、ただ1品種だけが、生育初期から花芽を着けて多くの種子を産するものがあり、人々はその完熟および未熟の種子を利用していた。この種子食用タイプのササゲは主に、インゲンが収穫された後に播種される。したがって種子の収穫は、雨季の終りから始まり、乾季中旬まで続くという。ササゲは、虫害を受けやすく、虫の多い湿潤季よりもかえって乾季の方が収量が高いといわれる [SMARTT 1976]。さらに土壌の乾燥がすすむと、徐々に落葉し、やがて地上部のほとんどが枯死する。ところが、ここの品種は、地際に形成された塊茎と地下部にデンプンを蓄積し、土壌水分が枯渇しても長期間その状態で生き続けることができる。雨季到来直後の雑草もあまり生えていない時期に、発達した根と貯蔵器官をもつササゲは急速に葉を伸長させ、短期間に葉の絨毯によって地表が敷き詰められる (写真6)。ササゲの旺盛な地上部の繁茂は他

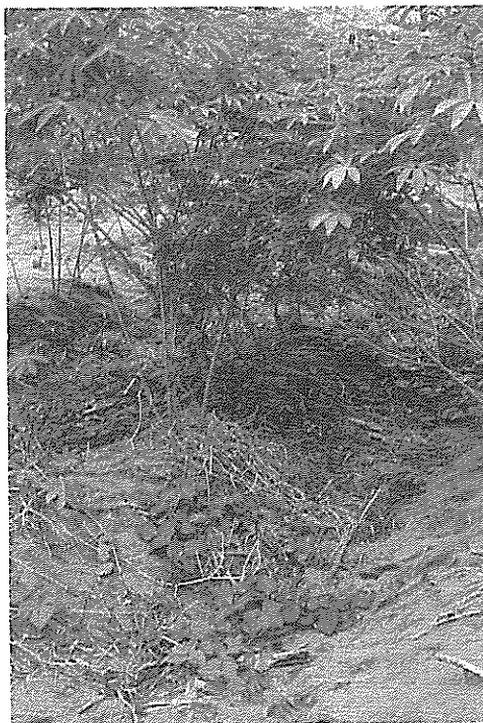


写真6 雨季初めのキャッサバとササゲ

の作物の生育を妨げるため、1年生作物収穫後、畝の片隅に1、2株だけが植ええられる。こうすることによって、2年目のキャッサバ単作畑を縁取るように広がるササゲは、キャッサバの生育に悪影響を与えずに栽培されることが可能となる。

完熟した莢が何度も雨にあたるとカビが生えることがある。そこで、完熟した莢は順次収穫しなければならないが、ササゲの開花は長期におよぶ反面、一日の開花数はわずかで、この仕事はそれに順じて数日ごとにおこなう必要がある。ササゲ栽培の盛んなナイジェリアでは、長期におよぶ収穫が労働の効率を悪くするとして、無限伸育性よりも立性のものが選択される傾向があるという。しかし、そのほとんどを集落内で消費するトンクウェにとっては、その日に食べる分だけを収穫すればそれでよく、労働効率は問題にならない。貯蔵中の虫害は深刻な害を引き起こすため [SMARTT 1976]、適切な貯蔵庫をもたない彼らには、1度に収穫するよりも収穫を分散した方が安定供給が維持されることになるのであろう。

トウモロコシ、インゲン、キャッサバが普及する以前は、トンクウェ・テリトリーでも東アフリカの諸地域同様、シコクビエ、ソルガム、ササゲといった作物の栽培を中心とした農業がおこなわれていたのであろう [SCHILPPE 1956]。しかし現在では、シコクビエ、ソルガムはこの地域でほとんど見るのできない作物となってしまった。伝統的な作物が新しく導入された作物に置き替わっていくなかで、ササゲが比較的多く残っているのは、栽培管理の容易さが最小努力の傾向性をもつ社会の中でより高い評価をうけ、そしてまた主作物であるキャッサバとの共存が可能であったことが大きな要因となっているものと考えられる。

4. 換金作物 トンクウェ族の換金作物は、陸稲、サトウキビ、プランテイン、バナナ、ラッカセイ、タバコ、アブラヤシなどであるが、収穫物のすべてを換金するわけではなく、自家消費される量の方がはるかに多い作物もある。最小努力の傾向性に加えて、換金機会の不足が換金専用作物を作らせない原因であると考えられる。

週に1度、ムガンボとコンクワの間の浜辺に市がたつ。市といっても、木を組んで作った粗末なテーブルが十数個並び、そこに女たちがもち寄ったわずかな農産物やダガー（淡水性イワシのなかま）の干物が並ぶだけのものである。ここでは貨幣による売買がおこなわれる。ここにもち寄られる農産物は、タマ

ネギ、トマト、キマメ、キャッサバの葉と芋、インゲン、ササゲの若莢といった、雨季の初めには限られた場所でしか栽培できない貴重なものもあるが、この地でごく普通に手に入る野菜がほとんどである。食物平均化というシステムが根強く残るトングウェ社会にあって、希少価値の高い作物ですら、欲すれば無償で手に入れることはできるはずである。まして、キャッサバの葉や芋といったどの農家でも作っている作物を売ろうとするこの市は、大変不可思議な存在だといってよい。

ムガンボには、アラブ人が経営するトングウェ・テリトリー唯一の雑貨店がある。人々は、そこで生活必需品を購入するのであるが、この際は貨幣が使われる。しかし、彼らはカヌーで沖合に乗り出し、碇泊中の客船で農作物を売る以外ほとんど貨幣入手の機会をもっていない。また、カヌーは一部のものが所有しているにすぎず、村内で貨幣の動きがなければ、多くの人々はムガンボの雑貨店を利用することはできないことになる。この市は、貨幣が村内を動く機会を提供してくれるが、売りに出されている農作物の内容からして、彼らは積極的に貨幣を配分しようとしているようにも思える。トングウェ社会のなかに、農耕以外の専業にだけ従事するといった分業システムが存在しないと仮定するならば、貨幣もまた平均化の対象となっているのではないかと考えられるのである。

5. プランテインの栽培 湖岸近くの低地には、バナナやプランテインの暗い林がある。果実の長さが10cmくらいのものから50cmに達するもの、樹高が3 mくらいから5 mをはるかに越えるような大きなものまで、その形態は変異に富んでいる。彼らがトングウェ名をつけて識別する品種は20品種を越え、そのほとんどはプランテインである。栽培は粗放で、サッカーの移植はもちろん、間引きすらおこなわれない。しかしその生育は非常に旺盛で、みごとな果房が収穫される。最小努力主義の彼らにとって、プランテインはキャッサバ同様格好の作物であるといえるだろう。

トングウェの主食であるウガリは、基本的には朝夕の2回とられるだけで、それ以外は随時間食がなされる。このようなときによく食べられるのは、キャッサバ（甘味種）、サツマイモ、ヤム、サトイモといった芋類と、プランテインである。もちろんプランテインは、ウガリの代用品とされたり、また重要な換金作物ともなっている。

湖岸とはいえ、プランテイン林が形成されるような水に恵まれた土地は決して多くない。したがって、この土地を所有していればこれだけで十分に生活

していけるものと考え、その所有者を見つけ出そうと試みた。ところが、所有者を特定することはできず、結局この問題は未解決に終わってしまった。伐り開く土地すらなくなってしまったカトゥンビでは、畑の所有者はかなりはっきりしているように思われた。しかし、プランテイン畑のような特殊な土地に半自生的に生える作物や、マンゴやアブラヤシなどの有用樹種には特定の所有者がいないか、あるいはいたとしてもそれはいわゆる通常の所有権という概念を当てはめるには困難な存在ではないかということがわかってきた。このような共有財産は、かつて焼畑農耕をおこなっていたときの川辺林に相当し、伝統的な社会機構によって共有財産を維持しようとしているものと考えられる。

V 山地農耕 マハレ山塊は、標高2462mのンクングウェ山を最高峰として、2000mを越す山々が連なっている。1000m以上は高原状を呈しているが、湖への斜面は急勾配で、一気に湖面にまで落ち込んでいる。山住みのトングウェ族とは、この高原を覆うミオンボ林と常緑の川辺林からなる植生帯に生活する人々を指している。台地上には、種々のイネ科の草本を林床とする閑散とした疎林が広がっている（写真7）。これとは対照的に、急な斜面には鬱蒼と茂った叢林や常緑林が形成され、疎開林との境界は明瞭である。彼らは、その河辺林を伐り開いて焼畑を作る。しかし幅広い台地に対して、河辺林が占める面積は少ない。した

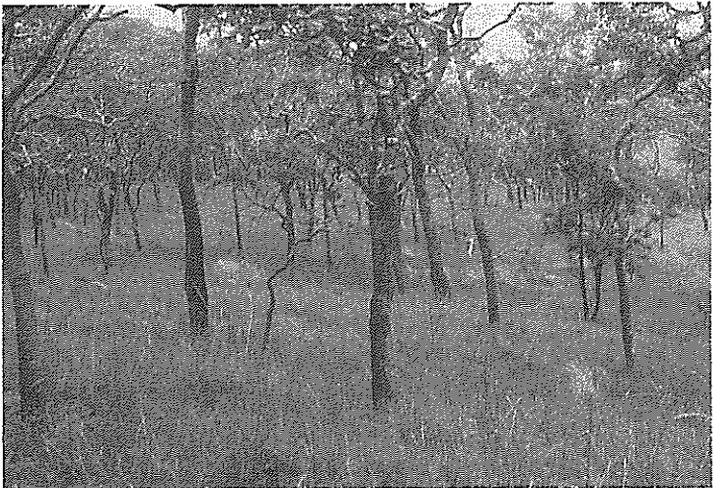


写真7 ミオンボ林

がって、この地で焼畑農耕を営むためには希薄な人口密度を保つことが必須条件となるであろう。

湖岸から最も近い山間の村ントンドへは徒歩で優に1日を要する。彼らは年に何度か湖畔の村に買い出しに行く以外は、ほとんど山を下りることはないという。しかし、山村間の交流は、その行程に数時間を要するにもかかわらず、かなり頻繁におこなわれており、互いの村の情報は詳細に伝えられている。彼らは、そこで農耕のほかに、採集、狩猟、養蜂、川魚の漁労といった多彩な生業を営む。また、農耕システムも、伝統的な焼畑だけでなく、河辺の湿地を利用した常畑栽培もおこなわれるようになっていた。筆者が訪れた三つの村では、この常畑への依存程度の差によって、それぞれ異なった農耕がおこなわれていた。外圧による生活状況の変化に対して、村の立地条件の違いによって、それぞれの農耕システムに差を生じさせたように思われる。ここでは、各村を比較することによって、環境と農耕システム、および栽培作物との関係について考察する。

1. 焼畑農耕 カルイガイジェは、ムガンボ川上流の、深くて急なV字渓谷の近くにあった。
(カルイガ 2戸からなる集落であったが、彼らがおこなう焼畑農耕は、1972年に掛谷が描
イジェ村) 写した焼畑農耕そのままの、伝統的な様式を色濃く残すものであった。彼らは、



写真8 カルイガイジェの焼畑

村に近い急斜面を2～3 haほど伐り開き、一面にトウモロコシ、所々にインゲンやトマトを植えていた(写真8)。斜面の上部中央には粗末な出作り小屋が建てられている。父親とその息子は、夜明けから夕暮れまでこの小屋から畑を監視する。一畳ほどの小屋のなかには、ゴルフボール大の石が山積みされていて、ボンゴ(ウシ科のレイヨウ)などの動物が畑に現れると、これを投げつけて追い払うのだという。栽培期間中、これが男たちのほとんど唯一の、そして大変重要な仕事なのである。これとは対照的に、女たちは男の留守中、家事をおこない、手が空くと野草の採集に出かけるといったふうに、1日中かがいしく働いていた。

筆者がカルイガイジェを訪れたのは、雨季に入ってから1ヵ月以上経過した時期で、畑のトウモロコシはすでに15cmほどに成長していた。しかし、畑には全く雑草は生えていなかった。広大な急斜面を、わずかな数人の手によってこれほどまでに除草することは不可能である。これは、火入れによって雑草の種子を死滅させる焦土効果によるものであった。太い幹はことごとく燃え残ったまま、畑の至るところに横たわっていた。また、肥料となるべき灰は、わずかな窪地に溜ったものが点在しているだけで、連日の豪雨によって急斜面を流れ落ちてしまったのであろう。つまり、ここでの火入れは、除草が主目的であるように思われる。そのため、燃えやすい枝葉によって表層土壌が焼かれさえすれば、太い幹が焼けずに残ったり、灰が洗い流されたりしてもいっこうに構わないのであろう。しかし、開墾初年度にもかかわらず、植えられている作物の葉色はけっして良好な状況とは言えず、土地自体はそれほど肥沃ではないように思われた。そのためか、これだけの土地を伐採するにはかなりの労働を必要としたことであろうが、彼らはこの土地をわずか1年で放棄し、次の乾季には少し離れた斜面を伐り開くと言っていた。

彼らは、この焼畑と家のまわりのわずかなカボチャ畑以外に畑をもたない。また、彼らはキャッサバを全く栽培しない。標高の高いマハレ山では、湖畔よりもかなり気温が低いため、低温に弱いキャッサバの収量は望めないからである。

2. 焼畑・常畑混合農耕
 カルイガイジェの南西約5 kmのところ、カベシ川支流の源頭部がある。このあたりは、緩斜面を小さな川がいくつも流れ、ところどころで湿地をつくっている。その一つの湿地のほとりにントンドがある。
- 村) 彼らの農耕は、この湿地周辺の常畑と緩斜面での焼畑である。湿地にはトウ

モロコシとプランテインが、家屋のまわりや湿地までの緩斜面にはキャッサバ、ササゲ、サツマイモが栽培されている。家屋を取り巻くようにして植えられたキャッサバは、茎の節間が極端に詰まり、伸長速度の遅さを物語っている。ここでは、芋の収量が期待できないので、ほとんど葉を採取するためだけに栽培されている。また、ササゲはキャッサバを支柱として伸長するが、人々は生育の速いササゲの方を重視し、この状態を放置して手を加えようとはしていなかった。

ここでも主食はトウモロコシである。湿地の畑ではトウモロコシが単作され、雨季の初めに収穫期を迎える。家から約1 km離れた緩斜面は、数年前に開墾され、その後毎年耕作の初めに、枯れ草に火入れをして利用されている。やはり、太い幹は焼け残っているが、カルイガイジェの畑とは違って、5 aほどの畑は一面の雑草で覆われていた。掘り棒で土にあげられた穴に、トウモロコシ、インゲン、カボチャが数粒ずつ播種される。ここでも男たちは畑の横に出作り小屋を建て、1日中監視していたが、小屋のなかには小石の代わりに、手作りのマスキット銃が仕掛けられていた。

ントンド周辺には叢林や常緑林を形成するような急斜面の土地はなく、畑とされるところも疎林である。しかし彼らは、一度拓いた畑を5～10年は使うという。

カルイガイジェ村に比べてこの村の焼畑耕作期間が長くなっているのは、ントンドでは、湿地常畑で安定してトウモロコシが生産できるので、焼畑への依存度はより低く、そのために焼畑の生産性にそれほどとらわれずに耕作を持続しているようにみうけられる。20年以上前に作られた地図に記載されているントンドの位置は、このときとほとんど変わっておらず、この湿地を利用した栽培もトングウェ族が伝統的におこなってきた農法の一つである可能性は高いように思われる。また、畑の傾斜度の違いに着目すると、農作業の難易や表層土壌の浸食、養分流亡の多少も、畑利用期間に影響を及ぼす大きな要因と考えられる。

3. 常畑農耕 ントンドから台地を南に15kmほど行くと、カベシ川本流の川床にイルンビの集落がある。1972年には、この集落は台地の上にあり、焼畑農耕をおこなっていたが〔伊谷 1974〕、1985年にはカベシ河畔の低地に家屋を移し、焼畑農耕は完全にやめてしまっていた。急な長い斜面に挟まれた狭い低地であったが、カベシ川のつくる肥沃な湿地は、2戸からなる集落のわずかな人々を養うには十

分なように思われた。台地上から川床への移住は彼らの生活を全く異なるものに変えてしまったようである。

低地は、右岸より左岸がわずかに高い段丘状の地形をしているために、湿地は主に右岸に形成されている。右岸では、トウモロコシの単作がおこなわれ、周年栽培されていた。左岸は、わずかながら勾配があるため、川から離れるにつれて水利条件は悪くなる。したがって、川近くでは乾季栽培も可能であるが、川から数メートル離れると天水依存の畑となり、そこには播種期を異にした3種類の畑があった。左岸畑のさらに山側には、プランテインに囲まれた屋敷があり、その後ろの比較的急な斜面、つまり最も水分条件の悪いところにはキャッサバ畑が広がっていた。

右岸のトウモロコシ畑とキャッサバ畑以外は混作畑である。主な作物は、ジャガイモ、トマト、インゲン、サツマイモ、プランテインである。彼らがいう作型によれば、1年を通じて上記の作物のいずれかがいつも収穫できる状態にある。

ここでもキャッサバは主に葉食用として栽培され、イモ栽培としては、生育適温の低いジャガイモが中心となっている。かつてほとんど栽培されることになかったジャガイモが、この地で特異的に栽培されていることの意味は大きい。ジャガイモはトングウェ・テリトリ全体からみてもごく希な作物であるが、山地帯の人口密度が前述のようにさらに希薄となり、食物平均化の機会が減少することによって、限られた生育適地だけのわずかな栽培が許されるようになったのであろう。つまり、“希少価値の高い作物は皆に乞われてなくなってしまふ”という心配が薄らいだために栽培されるようになったのがこのイルンビのジャガイモといってよいであろう。また、一見保守的に映るトングウェ族であるが、彼らはこういった間接的な栽培規制さえなくなれば、適作物を探索するといった進取の気性をもつ人々なのである。

筆者は幸運にも、マハレ山最後の山地農耕を見ることができた。それは、自然環境が異なるために農耕形態は異なるが、共に伝統的なカルイガイジェとントンドの農耕と、同じ環境のなかで大きくその形態を変えてしまったイルンビの農耕であった。しかし、彼らの生活はいずれも強く自然に依存している点で共通していた。彼らの食卓を彩るさまざまな食物は、湖畔の単調な食生活とは比べものにならないほど多彩であった。

と山地農耕 地域でおこなわれる農耕に大きな差を生じさせている。トングウェ族の伝統農
の比較 業は、ントンドやイルンビで見られるような焼畑農耕を中心としたものと考え
られるが、湖畔の限られた面積の中で高い人口密度を維持していくためには、
定着農耕が必要であった。しかし、湖畔の農業は単に焼畑農耕が定着農耕に変
化しただけのものではなく、居住様式など種々の生活条件の変化などによっ
ても影響を受けている。

トングウェ族は、農耕のほかにさまざまな生業を営んでいる。湖畔と山地の
農耕を比較するとき、他の生業とのかかわりについても考察する必要がある。
湖畔住民の他の生業は、主に採集と漁労である。しかし、人口集中に伴って開
墾が進み、人々に山からの採集品を提供してくれる自然林は集落周辺から完全
に姿を消してしまった。また漁労は、カヌーと網をもつ一部の人たちに限られ
る生業であるため、魚が食卓に上ることは少なく、魚がタンパク質の主要な供
給源になっているとは考えられない。副食物の中心は、やはり農作物である。
湖畔における栽培品種の多様性と利用頻度はそのことを反映しているように思
われる(表1)。これに対して、山住みのトングウェは、採集、狩猟、養蜂へ
の依存度が高く、多彩な副食物を農耕以外から得ることができるために、栽培
品種は非常に単調なものとなっている。

山住みのトングウェがかなり高い頻度で動物の肉を口にしているのに対し、
湖畔の人々は野生動物の肉を食することはほとんどない [掛谷 1974]。狩猟活
動の有無は両地域の人々が摂取する主なタンパク質源が異なることを意味し、
それはマメ類への依存度の差となって現れている。山地では、種子食用のマメ
類としてはインゲンが栽培されているにすぎず、また湖畔に比べてはるかに広
い耕地面積を維持しているにもかかわらず、インゲンの栽培面積は湖畔よりも
明らかに少ない。動物性タンパク質の供給量とマメの栽培面積との間には、ど
うも密接な関係があるようである。

湖畔と山地では主食となる作物が異なり、前者ではキャッサバが主、後者で
はトウモロコシが主である。キャッサバは16世紀後半にはすでに西アフリカに
持ち込まれていたが、内陸部への伝播は19世紀以降のこととされている [FRE
SCO 1986]。しかし、かつてはこの湖畔の低地もミオンボ林に覆われていた。
そこが常畑となり、そこでキャッサバがトングウェの最重要作物となったのは、
コンゴ動乱(1960～1965年)を逃れてきたベンベ族がこの地に住み着くよう
になってからのことだと言われている [伊谷ら 1973]。ベンベ族の流入がこの地
へのキャッサバ導入の大きな流れの一つであったとするならば、この湖畔の地

域は30年足らずの間に一面のキャッサバ畑に変えられてしまったということになる。毎年あるいは数年で耕作地を変えるトングウェ族の伝統的な焼畑耕作システムの中では、生育期間の長いキャッサバは主作物の地位を占めることはできなかったのかもしれない。このように考えると、トングウェ族の定住化にとって、キャッサバがきわめて大きな影響を及ぼしたと考えてよいように思われる。

しかし、キャッサバが山地帯であまり栽培されない理由は、耕作システムの違いによるものだけではない。標高差による湖畔と山岳地域の気温較差は、少なからず彼らの主要作物の選択に影響している。山地の村イルンビでは、定着農耕がおこなわれていたが、そこでの主要作物はキャッサバではなく、トウモロコシである。山住みトングウェたちは、トウモロコシこそトングウェ族の真の食物であると言い、それをさまざまな伝統的儀礼にも用いている〔掛谷1974〕。低温に敏感なキャッサバは、山地帯での芋収量が低く、人々の主食にはなりえない。キャッサバ栽培の可否が湖畔と山地の農耕の隔たりを大きくしているのである。

Ⅶ おわりに マハレ山塊で生活しているトングウェ族を、焼畑農耕民と呼んでしまうことにいささか抵抗を感じる。彼らはけっして焼畑に固執しているわけではない。ントンドで見られるような湿地を利用した農耕もまた、彼らが伝統的におこなってきた農耕なのである。彼らを取り巻く自然環境に合った農耕形態こそ、彼らの最小努力の傾向性に沿っておこなえる農耕なのである。湖畔への移住も、彼らの自然環境への従順な対応によって可能であったと考えられる。湖畔での農耕システムは、環境の変化に対する彼らの順化の一例にすぎない。すなわち、トングウェ族の伝統的社会的規範を維持したまま環境の変化に対応したのが現在の湖畔の農耕システムであったといえよう。

引 用 文 献

Fresco, L. O.

1986 *Cassava in Shifting Cultivation*. Floris Publication, Amsterdam.

伊谷純一郎

1970 『チンパンジーを追って』筑摩書房.

伊谷純一郎・西田利貞・掛谷 誠

1973 『タンガニカ湖畔—自然と人—』筑摩書房.

掛谷 誠

1974 「トングウェ族の生計維持機構—生活環境・生業・食生活—」, 『季刊人類学』, 5
(3): 3-90.

MURDOCK, G. P.

1959 *Africa ; Its People and Their Culture History*, Mcgraw-Hill Book Co., New York.

SCHLIPPE, P.

1956 *Shifting Cultivation in Africa*, Routledge & Kegan Paul, London.

SMARTT, J.

1976 *Tropical Pulse*, Longman Group, London.